

[D年] 聖霊降臨節第10主日(2020年8月2日)**【旧約聖書日課】列王記上 17章8～16節**

8また主の言葉がエリヤに臨んだ。9「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」10彼は立ってサレプタに行った。町の入り口まで来ると、一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤはやもめに声をかけ、「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」と言った。11彼女が取りに行こうとすると、エリヤは声をかけ、「パンも一切れ、手に持って来てください」と言った。12彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」13エリヤは言った。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。14なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。

主が地の面に雨を降らせる日まで

壺の粉は尽きることなく

瓶の油はなくならない。」

15やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。こうして彼女もエリヤも、彼女の家の者も、幾日も食べ物に事欠かなかった。16主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 14章10～23節

10それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。11こう書いてあります。

「主は言われる。

『わたしは生きている。

すべてのひざはわたしの前にかがみ、

すべての舌が神をほめたたえる』と。」

12それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。

13従って、もう互いに裁き合わないようにしましょう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、兄弟

の前に置かないように決心しなさい。14それ自体で汚れたものは何もないと、わたしは主イエスによって知り、そして確信しています。汚れたものだと思うならば、それは、その人にだけ汚れたものです。15あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません。食べ物のことで兄弟を滅ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んでくださったのです。16ですから、あなたがたにとって善いことがそしりの種にならないようにしなさい。17神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。18このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます。19だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか。20食べ物のために神の働きを無にすることはなりません。すべては清いのですが、食べて人を罪に誘う者には悪い物となります。21肉も食べなければぶどう酒も飲まず、そのほか兄弟を罪に誘うようなことをしないのが望ましい。22あなたは自分が抱えている確信を、神の御前で心の内に持っていない。自分の決心にやましさを感ぜない人は幸いです。23疑いながら食べる人は、確信に基づいて行動していないので、罪に定められます。確信に基づいていないことは、すべて罪なのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章22～27節

22その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。23ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所へ近づいて来た。24群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもこれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。25そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。26イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。27朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記上 17章8～16節

8主の言葉がエリヤに臨んだ。9「すぐにシドンのサレプタへ行って、そこに身を寄せなさい。私はそこで一人のやもめに命じて、あなたを養わせる。」10そこでエリヤは、すぐにサレプタへ向かった。町の入り口まで来ると、そこで一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤは彼女に声をかけて言った。「器に少し水を持って来て、私に飲ませてください。」11そこで彼女が水を取りに行こうとすると、エリヤは呼び止めて言った。「どうかパンも一切れ持って来てください。」12すると彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。私には、焼いたパンなどありません。かめの中に一握りの小麦粉と、瓶に少しの油があるだけです。見てください。私は二本の薪を拾って来ましたが、これから私と息子のために調理するところです。それを食べてしまえば、あとは死ぬばかりです。」13エリヤは言った。「心配は要りません。帰って行き、あなたが言ったとおりに調理しなさい。だが、まずそれで、私のために小さなパン菓子を作り、私に持って来なさい。その後で、あなたと息子のために作りなさい。14なぜならイスラエルの神、主はこう言われるからです。『主がこの地に雨を降らせる日まで、かめの小麦粉は尽きず、瓶の油がなくなることはない。』15やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。それで、彼女もエリヤも、彼女の家の者も幾日も食べることができた。16主がエリヤを通して告げられた言葉どおり、かめの小麦粉は尽きず、瓶の油がなくなることもなかった。

ローマの信徒への手紙 14章10～23節

10それなのに、なぜあなたは、きょうだいを裁くのですか。また、なぜ、きょうだいを軽んじるのですか。私たちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。11こう書いてあります。

「主は言われる。

『私は生きている。

すべての膝は私の前にかがみ、

すべての舌は、神をほめたたえる』と。」

12それで、私たちは一人一人、自分のことについて神に申し開きすることになるのです。

13従って、もう互いに裁き合うのはやめましょう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、きょうだいの前に置かないように決心しなさい。14私は主イ

エスにあって知り、確信しています。それ自体で汚れたものは何一つありません。汚れていると思う人にとってだけ、それは汚れたものになるのです。15食べ物のために、きょうだいが心を痛めているなら、あなたはもはや愛に従って歩んではいません。食べ物の中で、きょうだいを減ぼしてはなりません。キリストはそのきょうだいのために死んでくださったのです。16ですから、あなたがたにとって善いことが、そしりの種にならないようにしなさい。17神の国は飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。18このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人に信頼されます。19だから、平和に役立つことや、互いを築き上げるのに役立つことを追い求めようではありませんか。20食べ物のために、神の業を無にすることはなりません。すべての物は清いのです。しかし、つまずきを自覚しながら食べる者にとっては、悪いのです。21肉も食わず、ぶどう酒も飲まず、何であれ、きょうだいがつまずきことをしないことが良いことなのです。22あなたは自分の持っている信仰〔別訳→確信〕を、神の前で持ち続けなさい。自ら良いと認めたことについて、自分を責めない人は幸いです。23しかし、疑いながら食べる人は、罪に定められます。信仰に基づいていないからです。信仰に基づいていないことはすべて、罪なのです。

ヨハネによる福音書 6章22～27節

22その翌日、湖の向こう岸に立っていた群衆は、小舟が一そうしかそこになかったこと、また、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気付いた。23ところが、ほかの小舟が数そうテイベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所に近づいて来た。24群衆は、イエスも弟子たちもそこにはないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜してカファルナウムに来た。25そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「先生、いつ、ここにお出でになったのですか」と言った。26イエスは答えて言われた。「よくよく言うておく。あなたがたが私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。27朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもとどまって永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父なる神が、人の子を認証されたからである。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・8月2日「聖霊降臨節第10主日」の日課主題は、「命の糧」。前週から次週にかけて三週にわたって、福音書日課がヨハネ福音書6章(パンの章)から選ばれており、それに伴って、聖書日課全体の主題も一貫したものとなるよう旧約、使徒書から選ばれている。

・当日、8月第一日曜日は日本基督教団の定める行事暦で「平和聖日」。「平和聖日」は、広島原爆の日(8月6日)を憶えて世界平和と核兵器廃絶のために祈りを合わせることを趣旨として、1962年、広島教会で開催された西中国教区総会での提案決議を受けて、教団で定められた行事暦。

旧約日課(列王記上17章より)

・「列王記(上・下)」は、「サムエル記(上・下)」と共に「イスラエル王国記」を形成する書物であるが、さらにさかのぼって「ヨシュア記」および「士師記」とも一体の「イスラエル史記」として編纂された書物の一部である。「ヨシュア記」から「列王記」までの一連の書物は、ユダヤ正典では「前の預言者」と呼ばれ、「イザヤ書」から「マラキ書」までを指す「後の預言者」と共に、ユダヤ正典の「律法」と対を為す「預言者」を構成する。このような位置づけからも分かるように、「サムエル記」および「列王記」は、「王国記」の形態を取りながら、「預言者の物語」として解釈されてきた。おそらく、これらの「史伝」を伝承し「史記」として編集・編纂にまで至らせた主体に「預言者の伝統を継承する集団」があり、彼らが中心的役割を担った正典編纂によって「ユダヤ教共同体」が形成されたために、ユダヤ教における「律法と預言者」という正典の呼称が早くから定着したのだろう。なお、「列王記」の上下巻の区分は、ある時代以降に便宜的に設けられたものであり、解釈上、特別な意味を読み取ることはできない。

・「列王記上」では、日課箇所が登場する預言者エリヤのほかに、ダビデ王の死からソロモン王の即位に至る逸話に登場する預言者ナタン(1章)、ソロモン王の死後に王国が南北に分裂するに際して北王国を立てたヤロブアムの後ろ盾となった預言者アヒヤ(11章、14章)、ベテルの無名の老預言者(13章)、北王国バシヤ王に警告する預言者イエフ(16章)、北王国アハブ王に警告する無名の預言者たち(20章)、アハブ王の死を告げる預言者ミカヤ(22章)など、絶え間なく現れる。しかし、それらに囲まれて登場する預言者エリヤは、特異な存在として描かれており、何よりも預言者その人にまつわる伝承物語が中心となっている。「エリヤ伝承」は、「モーセ伝承」と共に正典外でも数多く伝えられており、古代イスラエル社会で広く流布していた伝承群があったものと考えられる。また、正典「律法と預言者」中、「律法」は「モーセ」と結び付けられるのに対して、「預言者」は「エリヤ」がその代表格として象徴的存在になっている。

・預言者エリヤの登場する場面設定は、紀元前9世紀、北王国でオムリ王朝が成立しサマリアに都が建設された時代、同王朝二代目のアハブ王およびアハズヤ王の時期である。オムリ王朝は、アハブ王の時代にシドン王国から迎えた王妃イゼベルによって持ち込まれたとされる「バアル宗教」が最大の問題として指摘され、預言者エリヤがバアルの預言者と対決する逸話が描かれるほか、エリヤの後継者として描かれる預言者エリシャは、そのオムリ王朝をクーデターで打倒した司令官イエフの後ろ盾として活動していたことが隠されることなく描かれ(下9章)、その最大の功績が「バアル神殿」の破壊であったと描かれている(下10章)。これらの構成からして、「エリヤ物語」におけるバアル預言者との対決は、「エリシャ物語」の伏線としての意味合いが強く、必ずしも預言者エリヤを理解する上で中心的な逸話ではないと考えられる。

・日課箇所は、「エリヤ物語」の最初の部分に含まれ、「サレプタのやもめ」の逸話として知られる。この逸話が「シドンのサレプタ」での出来事と明示されるのは、ときの王妃イゼベルの出身国が「シドン」であることを踏まえたものである。「シドン」は、現在のレバノン領域にある港湾都市で、ソロモン王の時代にレバノン杉を大量に輸入したことなどから深い関係を持ち、ソロモンもシドン人の妻を迎えている。その際にも、シドン人の祭神が持ち込まれているが、それは「バアル」ではなく「女神アシュレト」とされている(11章)。「列王記」は、イゼベルによって持ち込まれたものを「バアル(=主人/所有者)」と描くことによって、単に異国の祭神ということではない、より象徴的な意味を持たせているのであろう。そして、「サレプタのやもめ」がエリヤの神を受け入れる逸話をまず描くことによって、「シドン」という異国の祭神そのもの(いわゆる「偶像」!)が根源的な問題なのではない、ということを示そうとしているのであろう。

・この逸話で、エリヤがわずかな小麦粉と油から、やもめ親子と自身に十分な量のパンをもたらしたと描かれるのは、単にエリヤの奇跡物語であるというよりは、「モーセ物語」を踏まえた、「天からのパン」を与えられる神に対する信頼(信仰)の姿勢を提示するためであろう。この「天からのパン」に対する信頼の姿勢は、「モーセ物語」でも「エリヤ物語」でも、神信仰の基本をなす象徴的な行為として位置づけられている。この逸話の直前でも(2~7節)、また、エリヤが王妃イゼベルの追っ手を逃れてホレブ山に隠れた場面でも(19章)、エリヤは、神からパンを与えられている。

使徒書日課(ローマ14章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロが、近い将来にローマを訪問し、そこからエスパニア宣教へと送り出してもらうことを願って、ローマ教会の人々に宛てた書簡。執筆時、パウロは未だローマの教会を訪れたことはなく、自己紹介を兼ねて、ローマ教会が自身

の異邦人伝道に積極的に協力すべき意義を示す目的で、論を展開している。日課箇所は、12章から展開していた「キリスト者としての行動指針」の最後に置かれている、「他者を裁かない」ことについての勧告である。

・パウロは、「他者を裁かない」ことについて、すでに2章で触れている。それは、「互いに裁き合う」という現実が、パウロが主眼としている「異邦人問題」において避けて通れない課題であったからだろう。「異邦人問題」は、端的に、「ユダヤ人」から見て「異質な他者を受け入れるか、排除するか」という問題である。パウロが取り上げる「裁き(クリマ)／裁く(クリノー)」は、元来、「断罪」という意味ではなく、「分けること・選ぶこと(クリシス)」である。パウロは、他者に「罪」のレッテルを貼るような行為以上に、他者の「異質性」を「断罪」することによって「分断」を生じさせるような行為を戒めている。そこで、17節「神の国は飲み食いではなく…」も、教会共同体における飲食の意義を軽視しているのではなく、むしろ「善いこと」(16節)と見ているが、それでも、そのことが互いのそしりの種になり、誰かを排除するような結果になるならば、それは「すべての者」の「神の国」という理念を否定することになるのだから、それならば自分にとっての「善いこと」から退くべきである、と教えている。

・22節および23節「確信」は、すべて「ピステイス」で、「信仰／信頼／誠実」などと訳されるべき語である(聖書協会共同訳)。

福音書日課(ヨハネ6章より)

・日課箇所は、前週に続く箇所。「パンの出来事」(6:1~15)の後、弟子たちが湖を渡って行った「湖の出来事」(6:16~21)を踏まえて、場面設定があらためて詳細に描かれている。この詳細な描写は、大筋を追うには不要のようにも思われるが、人々が主イエスを捜し求めて行動していることを強調するために、あえて加えたのであろう。

・人々が主イエスの後を追って捜すが、彼らは追い切れず、主イエスの行くところに行くことができない、というテーマは、ヨハネ福音書で繰り返し現れる。ことに、主イエスご自身の発言として取り上げられ、敵対するユダヤ人も弟子たちも、「あなたがたは、わたしのいる所に、来ることはできない」と告げられている。ただ、弟子たちは「後について来ることになる」(13:36)と、条件付きで言われる。もちろん、これらは、主イエスが物理的に行かれる場所を指して言われているわけではなく、「父と子が一つ」であるところの霊的な関係性を指して言われているのである。日課箇所では、そのような人と主イエスとの間の認識の乖離を象徴することとして、「イエスは弟子たちと一緒に舟に乗られていなかった」こと、群衆も「イエスを捜し求め」たことが描かれているのであろう。

・「パンの出来事」と「湖の出来事」を踏まえて、告げられる主イエスの言葉(26節~)は、人々の認識がどのようなところにあるかという問題の指摘から始まっている。「しるしを見る」は、ヨハネ福音書では否定的な意味ではなく、むしろ人が信仰(父と子が一つであるところの関係性への参与)に至るために主イエスが示してくださる重要な手がかりであり、「しるし」を正しく「見る」ことが求められている。ここでは、「パンの出来事」の指し示す「しるし」を見ずに、「パンを食べること」で満足してしまっている人々の認識が指摘される。

・「パンの出来事」の指し示す「しるし」は、端的に、「モーセ物語」における「マナ」の意義付け(申命記8章)に沿っていることが、後述されている。

来週の誕生日(8月2日~8日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-171番「かみさまのあいはい」(=☐40番)は、カトリック司祭・佐久間彪が作詞した創作詩編歌(148編)で、1980年版『典礼聖歌』に所収後、1987年版『こどもさんびか2』に採用された。ローマ・カトリック教会は1960年代に開催した第2ヴァチカン公会議の結果、それまでの世界共通ラテン語典礼という原則を大転換し、信徒が完全に母国語でミサにあずかるという原則で典礼改革が行われた。以来、数多くの日本語典礼聖歌が創作され、その中からプロテスタント讃美歌に導入されたものも少なくない。プロテスタントとの共同翻訳である『聖書・新共同訳』も、この典礼改革の一環で行われたもの。佐久間司祭は、日本でこの典礼改革を担った委員の一人。

・こどもさんびか-34番「キリストのへいわ」は、

・21-69番「神はそのひとり子を」(☐20番)は、現代オーストラリアの讃美歌作家ロビン・マンの作詞作曲で、アジアキリスト教協議会編纂の「*Sound the Bamboo: CCA Hymnal 1990*」所収のもの。ルター派の神学校で神学と教会音楽を修めている。

21-69「神はそのひとり子を」

Father welcome all his children

Refrain:

Father welcomes all his children / to his family through his Son. / Father giving his salvation, / life forever has been won.

1. Little children, come to me, / for my kingdom is of these; / life and love I have to give, / mercy for your sin.

(Refrain)

2. In the water, in the word, / in his promise be assured: / those who are baptised and believe / shall be born again.

(Refrain)

3. Let us daily die to sin, / let us daily rise with him — / walk in the love of Christ our Lord, / live in the peace of God.

(Refrain)